町村民として活動し、日本國民としての義務を果すの基礎を造るものである。

斯樣な見地からすると幼稚園を自由勝手に設けるものとして置くことは出來ない。國民教育の大切な土臺を作る教育として、尋常小學校の如く、一種の義務教育としてもよいものであるかも知れない。今日の幼稚園は果して義務教育とするだけの働らきをして居るかと云ふに、遺憾ながら然りと答へることは出來ない。要するに幼稚園教育は家庭教育の助けをするばかりのものでない。如何に家庭教育が立派でも手の屆かない部分がある。そこを幼稚園で教育する。又學校教育によりても手の屆かない處がある。そこを立派に教育するのであるといふ考で改善を加ふることが幼稚園教育の發達の爲めに必要であると思ひます。

英文學にあらはれたる子供（六）

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

『トム』と『マギー』（つゞき）

――御菓子で又一喧嘩――

ある水曜日の事、伯父さん伯母さんがその翌日大勢御客に來るといふので、御菓子を燒く匂だの、汁の煮える馨りだのが臺所に漲つてゐて、何となく樂みで、陰氣らしくはして居られない日であつた。『トム』と『マギー』は幾度か臺所へ押し掛けて行くので、臺所では、その都度相當の獲物を渡しては、當分は侵入して來ぬやうにと賴むのであつた。

二人は接骨木の枝に腰を掛けて、「ジャム」入の御菓子を食べてゐたが、『マギー』は

マ「兄さん明日逃げるの」と尋ねた。(トム伯父伯母の訪問の日には煩さがつて、家を飛び出して仕舞ふのが例であつた)

ト「ウーン。逃げない」と「トム」は答へたが、自分の分は食べ果てゝ仕舞つて。二人で半分づゝにするといふ次の菓子を頻りに見てゐる。

マ「何故兄さん?「ルーシー」(従妹)が來るからなの。」

ト「イーエ。「ルーシー」なんぞ何と思ふものか。女の子じやないか。打毬戯も出來ない子だよ」といつて小刀を開いて御菓子の上に翳しながら、氣遣しさうに小首を傾けて居る。

マ「其では御酒入の菓子があるからなの。」と「マギー」は想像力を働かせつゝも「トム」の方に身を寄せて、目は菓子の上に動搖めいてゐる「ナイフ」を見詰めてゐる。

ト「馬鹿!チプシー菓子は明後日食べられるやうになるのではないか。「プッヂング」があるからなのだよ。何の「プッヂング」だか僕は知つてゐる。杏のだよ。あゝ食べたい」

と言ひ捨てた拍子に、「ナイフ」は菓子の上に落ちて、菓子は二つに截れた。が、結果が面白くないので、「トム」はやつぱり二つの切片を氣遣はしさうに眺めてゐる。暫くしてトムは、

ト「「マギ」さん目を御塞り。」

マ「何だつて」

ト「何でもいゝよ。お塞りといつたら塞ればいゝのだ。」

「マギー」は言はれるまゝにする。

ト「サー何方を取るのマギさん。右か、左か。」

「マギー」は「トム」の機嫌を害はぬやうにと、緊と目を塞ぎながら。

マ「「ジャム」の流れ出てゐる方」といふ。

ト「だつて其方は厭なくせに。公平に分けて、其

で「マギ」さんが其に當れば上げるけれど、さもなけりやいけないよ。右とか左りとか御定め。（「マギー」が細目に開いて瞰くので「トム」は憤發となつて）エー！目を塞いでゐるのだよ。サー、其でなけりやどつちも上げないよ。」

「マギー」の献身的精神も、其處までは發達してゐなかつた。「マギー」は良い方を與へて兄に喜ばれるのはいゝが、兄に皆與へやうと迄は思はないので堅く目を塞いで、「トム」が何方とか言へといふのを待つて、「左の方」と答へた。

ト「御前に當つた。」と「トム」は幾分か苦〳〵し氣にいふ。

マ「あら！ジャムの流れ出てゐる方？。」

ト「そうではないこちら。」と云つて「トム」は斷乎として大きい方を「マギー」に渡す。

マ「あら兄さん。此方を御取りなさいよ。ちつとも構はないの私は其方が好きなの。ヨー。之になさいよ。」

ト「イヤ〳〵不用ない」と苛立つて、「トム」は小さい方をさつさと食べ出した。

「マギー」はこの上爭つても無益だと思つて、自分も食べ始め美味さうにさつさ〳〵と食べてゐたが、「トム」は自分のが先へ無くなつて仕舞つたので、もつと欲しいなと思ひながら「マギー」の最後の一口二口を眺めてゐるより他はなかつた。「マギー」は「トム」が見てゐるとも心付かず、接骨木の枝に上下動をしながら、ジャムといふ事、暇で氣樂だといふ念を除いては全く我を忘れてゐた。最後の一口を頰張つた途端に、「トム」が「慾ばり！」と叫んだ。「トム」は自分が公平な取計ひをしたといふ自覺があるので、「マギー」が其を德として其だけの恩返しを爲べきだと考へてゐたのだ。「マギー」が上げると言つたのを先刻は拒んだけれど、自分のが手にある時と、食べて仕舞つた後とでは、自から思惑も違つて來るのであつた。

「マギー」は眞青になつた！

マ「あら、兄さん、何故呉れと言はなかつたの。」
ト「僕の方から呉れなんて言ふものか。慾張りめ！言はれないうちに其方で思ひつきさうなものではないが。僕が「マー」さんに良い方を上げたのを知つてゐるくせに。」
マ「だから上げませうと言つたではありませんか。さう言つたでせう」と「マギー」も氣を惡くする。
ト「言つたさ。だけど「スバウンサー」見たやうに公平でない事を僕はするものか。「スバウンサー」は打ちでもしないと、必然良い方を取つて仕舞ふし、目を閉ぢて僕が良い方に當つても、すり換へてしまふ。僕は誰とでも半分分けにする時には公平にするんだ。而して、慾張りなんかにはならないんだ」。
この刳るやうな諷刺を殘して、「トム」は樹の枝から跳び下りて、「ヤップ」といふ犬に「ホーイ」といつて御愛想に石を一つ投げた。「ヤップ」は、今迄御菓子の口に消えて行くところを、耳を動かして自烈つたさうに見詰めてゐたのだが、呼ばれると直ぐ御福分になつた程に迅速に「トム」の傍らへ來た。

併し「マギー」は「ヤップ」と違つて、苦痛を感ずる力があるだけに、ぢつと樹の枝に坐つて、咎もないのに、批難された口惜しさを染み〳〵感じた。あんな御菓子なんか、「トム」の爲なら、もう大喜びで口にせずにもゐられるものを。あの御菓子が美味くないといふ譯ではないのだが、（「マギー」の味覺は鈍くないのだから）「トム」に慾張りと言はれたり、怒られたりするよりは、もう〳〵食べずにゐた方がいくらよいか分らぬのに！上げませうといつても「トム」は不用と言つたから、自分は考もなく食べて仕舞つたので、どうも無理もない事なのだと思つて、涙がはふり落ちた。其で十分が程といふもの、四邊の物の見境も付かなかつたが、やがて怨恨の念もいつしか過ぎて、仲直

りがしなくなつたので「アギー」は急いで枝から飛ひ下りて、「トム」を探した。草の積んである庭の後ろの牧場にも見えない。「ヤップ」を連れて兄さんは何處へ行つたものだろうと、高い土手に走り登つて見ると、「フロッス」河の方が遠くまで見渡されて、成程「トム」が向ふに見えるには見えるが、隨分遠くの方を「フロッス」河を目指して、しかも一人でなく、「マギー」の嫌ひの男の子と連れ立つて行く樣子である。之でばもう望みの綱も切れ果てた譯である。「マギー」は仕方なしに冬青の傍に坐つて見たり、生垣に沿うてぶらついて見たりして、心の中で現在と異つた世界を仕組んで、自分の氣に入つた事柄を在らせて、僅かに樂しんでゐた。「マギー」の生涯は苦勞の絶えぬ生涯なので、こんな空想をして憂を忘れるのであつた。

（つゞく）

○エラクなる人

――（フレーベル會總會にて雙葉幼稚園後藤りん子氏談話の一節）――

此の頃大學の學生さんに會ひましたら、幼稚園時代に教はつたことが一番頭に殘つて居ると申します。自分もさうではないかと考へて居りましたので、かういふ確説をきいて少し威張つてみました。そこでどういふ感化が一番殘つて居ますかと尋ねましたら、幼稚園時代に嘘を敎へられたことには困つて居るとの答へで、今度は震へ上りました。その通りすべてに印象が強いのであるから將來に大切のことを此の時代にしつかり頭に入れて聞いたらと思ひまして次の數條を擧げてみました。序ながら私は利口と馬鹿といふ言葉は決して使はないで、強い人弱い人と申して居ります。

エラクナル人

○ウソヲイハヌ人
○イケナイコトダトオモツタラスグヤメル人
○ナンデモヒトリデヤル人
○ドンナコトデモガマンノデキル人
○ツブンヨリカヽキナ人ノ云フコトヲヨクキク人
○ヨクイモノヤ、小サイモノヲカワユガル人
○ヨクベンキヨーシテヨクアソブ人
○ベカラズノナカニハイラヌ人

入園の始めから此の心持で敎へて居りますが別にあらためては昨年と今年とは小學校に入る一週間前に申しました。來年は一月前位に致さうと思つて居ります。覺えても覺えないでも自由に致して無意識に暗誦させて頭に入れて置きますと、後年重寶するだらうと存じます。べからずと申すのは子供の一人がしてはいけないと云ふ事をべからずと申したので、それから使ひました。